

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第79号

2018年3月

日本薬史学会2018年度の主要行事のご案内

日本薬史学会編集委員会委員長 西川 隆

本学会の2018年度の総会関連の日程をお知らせします。2018年会（新潟市）など、主要日程の詳細は本学会のウェブサイトなどで続報します。

●総会関連

開催日：2018年4月14日（土） 12：00より受付開始

会 場：東京大学大学院薬学系総合研究館2F 講堂

1) 12：30～13：30 理事・評議員会（10階大会議室）

2) 14：00～15：20 総会（2階講堂）

3) 15：30～17：40 公開講演会（同上）

15：30～16：30 高橋京子 先生（大阪大学総合学術博物館 資料基礎研究系）

「新たな医療文化の形成：緒方洪庵の薬箱研究」

16：40～17：40 八木澤守正 先生（慶應義塾大学薬学部）

「梅澤濱夫先生の足跡：カナマイシン60周年を記念して」

山崎勝久 先生（微生物化学研究会附属微生物化学研究所）

「梅澤濱夫記念館目黒の新設について」

4) 18：00～ 懇親会（ブルークレール精養軒 東京大学病院店） 会費5,000円（予定）

●柴田フォーラム（未定）

●日本薬史学会2018年会（年会長：新潟薬科大学 寺田 弘学長）

開催日：2018年10月27日（土）

会 場：メディアアシップ6階 日報ホール（〒950-8535 新潟市中央区万代3-1-1）

（URL：http://niigata-mediaship.jp/facility/f03_hall/）

ワルシャワでの第43回国際薬史学会に参加して

日本薬史学会広報委員 夏目葉子、名誉会員 津谷喜一郎

第43回国際薬史学会（ICHP）が、2017年9月12日～15日、ポーランド共和国のワルシャワ大学図書館で開催された。昨年はポーランド薬局方が出版されて200年目に当たった。それに因み今回のテーマ

は「薬局方・薬剤師の組織化の歴史、薬用植物を用いた処方」であった。ポーランドの薬学教育は1817年にワルシャワ大学に薬学部が設立されたことに始まる。しかしポーランドは1832年にロシアに併合されることにより消滅した。そして第二次世界大戦後の1947年に国家が再建されている。そのような歴史を踏まえ今回の学会長であるIwona Arabas(ワルシャワ歴史博物館薬学分館長)は、薬学教育における薬学史教育の重要性を基調講演で述べられた。開会式の後半には、ポーランド出身のショパンのピアノミニコンサートが催され、参加者はその繊細な旋律を堪能した。

口頭発表は96題、ポスター発表は44題であった。招待講演は7題あり、アメリカ薬史学会会長Gregory Higbyが「米国薬局方の成立からアメリカ薬学会の設立まで」を、日本からは津谷が「日本薬局方の131年の歴史」の講演をした。ポスター発表では、内野 花が「まくり(海人草)を用いた新生児のための漢方処方」を、夏目が「『バウアー写本』と『インド・アーユル・ヴェーダ薬局方』に共通するトリパラーの処方」を発表した。

発表全体としては薬局方や薬剤師の組織化に関する演題が多い。また薬学博物館や大学所蔵の薬草標本の管理に関する研究発表も少なからずみられた。ユニークな発表としてはイスタンブール大学のAfife Matによる「薬局の日」があった。トルコ共和国においては、1968年に5月14日を国民の休日として制定し、「薬と健康」に関する啓蒙活動を国家が推進しているとのことである。また、ウィーン大学においては、世界の薬学博物館が所蔵する薬用植物標本のデータベースを作成中である。そのようなこ

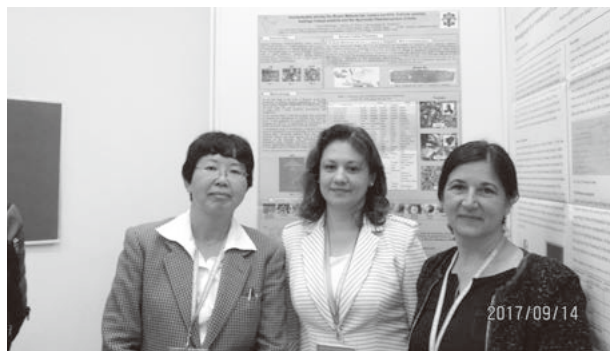
とから、ISHP会長で、同大学のChrista Kletterは参加者たちにプロジェクトへの協力を求めている。

なお、招待講演と口頭発表のスライドのうち18題は、津谷のものを含め学会 website で公開されている。ICHP Warsaw で検索すると見つかる。

今回、イスラエルのEfraim Levが、国際薬史学アカデミーの新会員とされた。専門はイスラエルやイランをはじめとする西南アジアの医学史であり、アジアの薬用植物にも通じておられる。夏目は内野の紹介で話をする機会を得た。シナゴグのことなどをお話しして下さり、その気さくな人柄に感銘を受けた。またヨーロッパからの参加者が多数を占めるなかで、イラン・イスラム共和国の薬学史研究者とも交流することができた。このことは、古代インドの薬学写本を研究する夏目の意欲を湧き立たせ、世界レベルの薬学史研究とは、どのようなものなのかを考える契機となった。

また、ワルシャワ歴史博物館薬学博物館には、和漢を扱う展示室も併設されており、ポーランドと日本の薬学を通じた交流を垣間見ることができた。

次回のICHPは、2019年に米国のワシントンD.C.で、「医薬品産業」と「薬学史における薬の効果の変遷」をテーマとして開催される予定である。



六史学会報告：「シソの古典的記述から」

日本薬史学会評議員 伊藤美千穂(京都大学大学院薬学研究科)

恒例の六史学会例会が2017年12月16日(土)の午後、東京・お茶の水の順天堂大学医学部の講堂で開かれました。薬史学会からは企画委員長のジュリア・ヨング先生から指名を受けて、私が「シソの古典的

記述」と題して話をしました。編集委員会の依頼で、当日の講演内容の要旨を記述しました。

シソには葉が緑色のいわゆる大葉タイプと表裏両面が赤紫色の赤紫蘇、向軸側が緑色で背軸側が赤紫

色の片面ジソがあるが、薬用にするのは赤紫蘇か片面ジソである。医薬品として蘇葉を取り扱う際には、形態的特徴に加えて精油にペリラルデヒドというジソ特有の成分を十分量含んでいることが必要で、これらの特徴を確認することで生薬としての品質と安全性を確保している（日本薬局方参照）。

生薬としての蘇葉は半夏厚朴湯、香蘇散等の漢方処方配合される。これらの漢方処方の最も古い出典は金櫃要略であるものの、生薬各論としての蘇葉は神農本草経には記述が無く、名医別録の中にあるものが最も古い記述のようである。

神農本草経以降の本草書を網羅的に集約して明の時代に編纂された本草綱目の記述によれば、ジソ（蘇）は舒暢（ジョチョウ：心をのびのびさせる）作用や行気活血（気を廻らせ、血を和ませる）作用が期待できる生薬で、葉の下面が紫色でなくて香りがよくない野蘇は薬用には適さない、薬用には葉の両面が紫色のものが良い、等とも書かれている。

これらの古典の記述は、これまで筆者がジソについて行ってきた様々な実験結果とよく符合する。すなわち、ジソ属植物には栽培種と野生種があるが、蘇葉の香りであるペリラルデヒドを含むものは栽

培種のジソのみに見出され、葉の両面が赤紫色のものも栽培種のジソにしか存在しない。さらにマウスを用いた生薬薬理学的研究からは、ペリラルデヒドを含む蘇葉の精油画分は、ごく薄い濃度で吸入投与するとマウスの運動量が減っておとなしくなる等の効果があり、いわゆるリラックスと表現される効果、古典の記述で言えば舒暢作用があるのではないかと考察されたのである。

経験により導き出された古典の記述を実験データで裏付けることができる例を示した。今後もジソについて、また生薬について、さらに探求してゆきたいと考えている。



中部支部だより

日本薬史学会・中部支部例会

日本薬史学会中部支部長 河村典久

下記の通り、中部支部例会・講演会を開催しました。

記

日時：2018年2月10日（土）午後2時～4時

場所：金城学院大学・栄サテライト

〒460-0003

名古屋市中央区錦三丁目15番15号

CTV錦ビル4階

（セントラルパーク地下街10A出口前）

例会：

演題1：「毒物と解毒薬」

○ 稲垣裕美、森田 宏（くすり博物館）

演題2：「詹糖香について」

○ 指田 豊（東京薬科大学名誉教授）

演題3：「平田眠翁の因伯産物薬効録について」

○ 中島路可（鳥取大学名誉教授）

連絡先

日本薬史学会・中部支部 名城大学薬学部

飯田耕太郎

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL：052-839-2710（直通）

FAX：052-834-8090

E-Mail：iida@meijo-u.ac.jp

初日の出に照らされる緒方洪庵像と適塾 (カメラ：E-PL8・Bell&Howell Lumax 1inch f1.9 USA製)

グリーン薬局 臼井一城

元旦に大阪府中央区にある適塾に行って来ました。写真は、縁起の良い適塾から昇る初日の出の写真です。

銅像の写真は1940-50年代製のオールドレンズで撮影しました。ミラーレス一眼は、90年前のレンズでも規格が合えば使用出来ます。

戦後の歩みを記憶するレンズで、史跡を撮影する。味わい深いです。適塾にお越しの際は、近隣の北浜レトロビルヂング(明治45年築)で明治の風を感じながら紅茶を飲んだ後、適塾に向かっていただければと思います。(適塾の写真は広角レンズ:M.ZUIKO DIGITAL ED 9-18mm F4.0-5.6にて撮影)



大橋清信先生を偲んで

日本薬史学会副会長 御影雅幸

本学会名誉会員の大橋清信先生におかれましては、去る2017年11月6日に永眠されました。大正6年8月のお生まれで、享年100歳でした。謹んで哀悼の意を表します。

富山県ご出身の先生は、昭和12年に富山薬学専門学校をご卒業になり、以後地元の薬業界に尽力してこられました。

戦時中に帝國化成株式会社の創立に関わり、空襲による戦災からの復興にはずいぶんと苦労されたようです。後のテイカ



大橋清信先生

富山県薬剤師会理事として富山県の薬業界の発展に大いに寄与されました。中でも、『富山県薬剤師会100年史』の編集に専門委員として参画された業績は今でも高く評価されています。

富山薬学専門学校を前身とする富山大学薬学部の同窓会である富山薬窓会のお世話もされ、おそらくそれがあってしばしば大学にいられていたのだと思いますが、私が富山大学

に在籍していた頃にはよく研究室にやって来られました。いつも笑顔で、大橋先生といえば笑顔しか思

い出がないほどです。当時、先生からインパクトの強い話をお聞きして、薬史学に目覚めるようになったのは私一人ではなかったと思います。先生には種々の御著書がありますが、その頃頂戴した随想集『みやらくもん』を読み直してみますと、収録された何れの話題も事象の本質を追求する鋭い内容になっていて、先生の薬史学に対する原点を垣間みた気持ちになりました。

本学会には1989年に入会、96年から7年間評議

員を務められ、その間2002年10月には本学会としては2回目の年会となる「平成14年度年会（富山市）」の執行委員長を務められ、「江戸期越中売薬の薬方について」の演題で一般講演もなされました。『薬史学雑誌』や『薬史学通信』にも、売薬を中心として多数寄稿されるなど、学会の発展に寄与されました。

先生のご指導に感謝し、また数々のご功績を偲び、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

日本薬史学会名誉会員高橋文先生を偲んで

日本薬史学会評議員 儀我久美子

日本薬史学会名誉会員・日本医史学会理事・国際薬史アカデミー会員・日仏薬学会理事高橋文先生が2017年10月12日に亡くなられた。享年84歳でした。

山田光男先生とお見舞にご一緒した2日後だった。高橋先生は1955年金沢大学卒業後、新潟大学・私立大学病院などを経て1970年代にウプサラ大学へ留学された。帰国後も江戸時代のケンペル、シーボル



高橋文先生

トと並ぶ有名なオランダ高官付医師ツェンペリー Carl Peter Thunberg (1743 - 1828年)の研究を続け2009年にはツェンペリー著「江戸参府随記」を平凡社から翻訳出版された。他に「福祉社会スウェーデンの新しい動向」、「ツェンペリーと日本」など共著や論文が数多くある。

ツェンペリーは蘭学・医学を日本に伝授し日本の動植物を海外に紹介しているが、日本薬局方にも掲載された駆梅用水銀水を高橋先生は詳細に研究、母校で博士号を取得、2013年度日本薬史学会賞を授与された。

2010年京都府立植物園で小野蘭山除幕式の際、松田清京大教授幹事の下で開催の講演会演者スキュンケ ウプサラ大学教授が高橋文先生に真っ先にご挨拶

をされた光景はスウェーデン国王ご夫妻訪日の折に宮中晩餐会で文先生が同席された逸話を彷彿とさせた。

山田光男先生によると野上寿第3代会長時代に江本龍夫先生を補佐、柴田承二会長時代には統括者として逼迫財政を立て直し、日本薬史学会創立40周年スウェーデン薬史学会訪問では皆さまを先導、50周年に向けての積立金準備などの功績は大きく、名誉会員推挙は全会一致との

事である。清水藤太郎・宗田一・酒井シヅ先生を医史学・薬史学の師と仰いでおられた先生は、青木允男先生を囲む「古文書学習会」や「山川塾」などを細やかにお世話して下さった。

私生活では姪御さん母娘を慈しみ、会計担当時お世話になった学会誌刊行センターの大角玲子氏に感謝、学校薬剤師として所属の中野区薬剤師会の皆さまを尊敬され、徳久和夫・荒木二夫氏ら同窓生を信頼しておられた。貴重な蔵書はご遺志により武田科学振興財団へ寄贈されるとの事。今頃は翻訳半ばのスウェーデン語に取り組んでおられるであろう。亡くなる数日前にオレンジゼリーを「美味しい！」と喜ばれたご様子が臉に浮かんでくる。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

薬史往来

ケンブリッジの薬剤師 E・S・ペックの生涯と事績

日本薬史学会理事 柳澤波香

学都ケンブリッジの中心街トランピントン・ストリート30番地には1851年創業の薬局がある。アーンスト・S・ペック(Ernest S. Peck)は1866年、この薬局店主の次男として出生した。父の薬局G. Peck & Sonで徒弟修業を積み、1888年に英国薬剤師協会の普通試験、翌年には上級試験に合格し同協会正会員となった。更にケンブリッジ大学で化学を専攻し、1896年に学士号、1897年に修士号を取得した。1904年に父親の事業を承継し、薬局店主となった。1922年、英国薬剤師協会の評議員となり、薬事および薬学教育の進展に尽力し、1935年に会長に就任した。

ロンドンでの薬剤師協会の多忙な職務を遂行しつつ、ケンブリッジ市の発展を常に願ったペックは、地元の書籍商と共にロータリークラブの支部を創設し、慈善活動、社会振興に力を注いだ。1924年には市議会議員となり、公衆衛生、児童福祉の拡充、図書館運営を担った。郷土の歴史、文物に精通したペックは郷土博物館設立に参画し、初代館長を務めた。地域住民からの信頼が

厚く、1937年にはケンブリッジ市長に選出された。

薬学と化学の専門知識を持つペックは薬史学の分野においても多大な功績をなした。18世紀初頭のケンブリッジ大学初代化学教授ヴィガニの薬棚を同定し、収蔵されていた600種類以上の天然薬物を調査した。更に、大学所蔵の、内科医アデンプルック(ケンブリッジ大学病院創設者)、ヘバデン(ヘバデン結節に名を遺す内科医)の薬棚の収蔵品を研究し発表を行った。ペックは金属製ベル型乳鉢と古い薬壺にも造詣が深く、蒐集品は数百点に上ったが、それらは英国薬剤師協会、ケンブリッジ大学博物館、市の郷土博物館に寄贈、遺贈され展示されている。英国薬剤師協会の貴重な所蔵品のひとつに医薬の神アポロンが描かれた1647年作製の薬壺があるが、これはペックの勧めにより取得されたものである。

薬局は1977年にペック家の所有を離れ、現在はFitzwilliam Pharmacyとなっているが、店舗の入口には今もG. Peck & Sonの看板が掲げられている。

編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定および理事・評議会の承認により経費削減のため、第75号の「薬史レター」からE-メール配信に原則切替えました。日本薬史学会ホームページ上に新刊薬史レターが開けるアドレスを記載しておきますのでクリックするとご覧になれます。また、発行回数は年4回を2回とし、1号のページ数は原則8ページ以内で発行しています。これで経費は大幅な削減が見込まれます。ご意見をお聞かせ下さい。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長:西川 隆

編集委員:荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第79号 2018年3月

編集人:西川 隆 発行人:折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>